

目次

『文豪たちの東京』関連マップ……………	4
刊行にあたって……………	坂上 弘 6
はじめに 東京文学を歩く……………	池内輝雄 8
生活を支えた本郷菊坂の質店 樋口一葉と伊勢屋……………	山崎一穎 13
千駄木・団子坂——確執と親和の青春 森鷗外と高村光太郎・木下杢太郎……………	小林幸夫 52
漱石作品における「東京」の位置 「山の手」と「下町」の視点から……………	中島国彦 77
女性たちの東京 泉鏡花と永井荷風……………	持田叙子 94
近代医学へのまなざし 斎藤茂吉と青山脳病院……………	小泉博明 124
作家たちの避暑地 芥川龍之介の軽井沢体験など……………	池内輝雄 156

伏字の話から始まって 淳・万太郎・瀧太郎……………武藤康史 175

林芙美子の東京 雌伏期の雑司ヶ谷、道玄坂、白山上南天堂喫茶部……………江種満子 213

遊び、働き、住むところ 川端康成・佐多稲子たち、それぞれの浅草……………宮内淳子 247

【文学館を歩く】

台東区立一葉記念館 我が国初の女性作家の単独文学館……………289

調布市武者小路実篤記念館 終の住処で文豪の足跡を巡る……………292

田端文土村記念館 芥川を慕った文士たちの軌跡……………295

世田谷文学館 子どもから大人まで楽しめる文学館……………298

太宰治文学サロン 太宰治の足跡を伝える情報交流と発信の場……………300

文京区立森鷗外記念館 鷗外の旧居「観潮楼」跡地に建つ……………303

新宿区立漱石山房記念館 「漱石山房」の再現と記念館の整備……………306

日本近代文学館 日本初の近代文学総合資料館……………309

執筆者略歴……………312

刊行にあたって

公益財団法人 日本近代文学館理事長

坂上 弘

当館に「資料は語る」という新講座が開講したのは二〇〇九年のことだった。

一九六七年に開館した当館は、雑誌・新聞・図書・全集などの文字資料の宝庫であるばかりでなく、作者の手が加えられた肉筆資料（校正刷、発表後書き直された本文、執筆意図を記した書簡など）の宝庫でもある。こうした稀有な資料とともに、いわば立体的に研究することによって、作者や作品の全体像が鮮やかに浮かび上がってくるだろう。

以来、この講座は、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治をはじめ、近現代の文学者と作品を対象に、幅広い作家・研究者を講師にお迎えしてきた。そして年度ごとに「文学の〈大正〉」「青春と文学」「作家からの手紙」などのテーマを設定し、主題と切り口が豊富になればなるほど、文学の深みへと入り楽しむ講座となり、人気を博してきている。

二〇一三年と二〇一六年の講座「資料は語る」では、「資料で読む『東京文学誌』」をテーマとした。講師の皆様は、東京をテーマに描いた、また東京を内面に抱いた文学作品についてお話しいただいた。近現代を息づく東京は、在住の文学者たちの目にどうとらえられてきたか。森鷗外、夏目漱石、樋口一葉、斎藤茂吉、芥川龍之介、川端康成、林芙美子たちは成長する稀有の大都市東京をどのように見つめ生きてきたか。書下ろしも加えて、『文豪たちの東京』という一冊にまとめてひもといっていたことは、私共として大きなよろこびである。

編集にあたって著作権者の皆様のご協力を得て、文学者を育んだ東京の資料写真を掲載できた。また東京で活躍する文学館や記念館から所蔵資料の紹介などのご協力をいただいた。ご執筆者や文学館・記念館の皆様にご心から感謝申し上げます。

二〇一九年十二月

はじめに 東京文学を歩く

公益財団法人 日本近代文学館副理事長

池内輝雄

I

日本近代文学館の片隅に BUNDAN COFFEE & BEER という小さな店がある。活字に疲れた目を休めるため、利用者も多いようだ。コーヒーの味もなかなか。庄巻は店主が集めたという近代文学の単行書が棚という棚にぎっしり並べられていることだ。

いまだ古書店でも、これほど充実した書棚にはあまりお眼にかかれない。

ところで先日、たまたま座ったテーブルのほぼ正面の棚に、背表紙に『木』というすつきりとした書体の本があるのを見て懐かしい思いがした。『木』は周りの本（四六判）よりやや背が高く（菊判）、頭だけが飛び出している。その高さ分のところに題名が一文字、墨書されている。あたかも〈木〉が周囲から浮き出たように。

家に帰って、あらためて『木』を手にとって見た。著者は幸田文。『木』は一九九二年、新潮社から出版された随筆集である。かつてこの本は高校教材や入試問題によく使われた、いわ

ば古典的なテキストだった。今読み返してみても、じつに見事な文章である。

特に有名な第一章「えぞ松の更新」は、北海道の自然林の中で営まれる「倒木更新」について触れたもの。著者は、北海道の厳しい自然のなか、種が倒木の上に落ちただけで、なぜ発芽するのか、と不審に思う。演習林の先生は、腐った「ポロ」としか言いようがない倒木の古株が腐りきらずに、適度の水分を蓄え、温床のようになり、新しい種を芽吹かせ、育てるのだという。著者は、古木は「ただ死んじやいないんだ」と感じとり、新樹たちは古株の保護のもと、「真一文字」に、すきつと立っているのだ」という感慨を抱く。

ああ、そうなのか、と納得する。書物の背表紙のあの丈高き書体には、著者のそのような深い思いが込められていたのだと思う。ついでに、文学館の設立にも、同じような思いが込められていたはずだったと気づかされた。

文学館にお立ち寄りの際には、どうか、この本の置かれたさまをご覧いただきたい。

2

文学館は半世紀以上前の一九六三年に設立、一九六七年、この地、駒場公園内に開館した。設立・開館に当たった高見順、川端康成、伊藤整、稲垣達郎、小田切進ら文学者・研究者は、「このままでは多数の貴重な文学資料が失われ、ひいては日本の文化が亡びる」という危惧から、図書・雑誌・原稿・書簡・写真・遺品など、近代文学資料の収集に力を注いだ。

所蔵資料は、高見順初代理事長によるおよそ五万点におよぶ寄贈をはじめ、文学者・研究者・愛書家による多数の方々の寄贈に、館独自の購入を含め、およそ一二〇万点に及ぶ。文学

の専門館として充実した内容を整えるにいたっている。

また開設当初を除いて公的機関から助成を受けず、現在は「公益財団法人」として、維持会員・友の会会員からの会費、および出版社・各地の文学記念館・大学図書館などの団体の維持会費、講演会などの入場料で運営している。

さいわい、たくさんの方々のご助力を得て、資料は本館だけでは収まりきれないほど。見かねたある篤志家から千葉県成田に分館建設のための土地を寄贈され、全国の方々の寄付も仰ぎ、二〇〇七年に無事成田分館を開館した。

3

問題は多くの資料を書庫の中に眠らせたままではなく、いかに有効に活用させるか、ということになる。

当館は、開設以来、図書資料の閲覧や出版をはじめ、展覧会、講座、講演会、朗読会など、文学の盛行・普及に力を注いできた。

その一環として数年前、講座「資料は語る」を開いた。中でも副題に「東京文学誌」と名づけた講座は評判が芳しかった。「東京」という歴史的・文化的空間に深い関係を持つ作家・作品について、原稿・書簡などの肉筆資料、場所や風俗に関する各種資料をまじえながらの話は、東京にかかわりのあるなしにかかわらず、多くの方々の興味・関心を喚起したようだ。

今回、勉強出版からその講義の一端を出版することとなった。さらに、関連する新たなテーマの論考も加えた。いずれにしても、こうした形で世に出ることは、関係者として望外のよろ

こびである。

最近では、特に若い世代（中・高校生や大学生）を対象に、展覧会「教科書のなかの文学／教室のそとの文学」シリーズとして「芥川龍之介『羅生門』とその時代」（二〇一七年）、「中島敦『山月記』とその時代」（二〇一八年）、「森鷗外『舞姫』とその時代」（二〇一九年）を開いた。さいわい、受講者は一般の方々に交じって多くの若い世代が集まり、好評だった。

また、中学・高校の国語担当の教員を対象にしたセミナー「教室」と「文学」をつなぐ（二〇一七年）を開催した。多数の参加者の熱心な議論が、予定時間をオーバーして続けられ、「次年度以降もぜひ」という強い要望が寄せられた。

展観を見るだけでなく、講師とともに文学資料をいかに読むか、そのことが社会・文化とどうつながるか、考え、討議する場を広げることが大切であることが痛感された。

本書も、そうした若い世代にも読まれることを期待したい。

「倒木更新」のように、より味わいのある文学・文化が継承されるために。

4

ふりかえって「東京」の歴史を見ると、東京は近代になって少なくとも二度の大きな災害に見舞われている。関東大震災と太平洋戦争下のアメリカ軍による大空襲である。

関東大震災は、一九二三年九月一日、神奈川・東京地方を襲った大震災で死者は一〇万五〇〇〇人、全壊家屋二九万四〇〇〇軒という。

東京大空襲は、主に一九四五年三月から五月にかけて行われ、死者一〇万人以上、被災者

一〇〇万人以上。東京市街は下町を中心に五〇パーセント以上が焼失し、焦土と化した。多摩地区の立川・八王子も空襲を受けた。

そうした大災害にもめげず、東京は復興し、発展を遂げてきた。特に関東大震災後に始まった近代的な建築と昭和通りと呼ばれるような新しい道路の建設、あるいは焼け残った古い街並みの保存や維持。さまざまな要素が、現在も東京に独特な風情と詩情とを残している。

戦後は一九七〇年前後から都市再開発が始められる。典型的な例は東京多摩地区のニュータウンで、山を崩し、谷を埋め、自然木をはぎとる土地改造と、新しい様式の集合住宅や家屋の建設が行われた。よかれあしかれ、従来の自然環境と住宅地との関係性を根本から変更する大きなプロジェクトであった。

文学作品を例にとれば、安部公房『燃えつきた地図』、遠藤周作『海と毒薬』、小島信夫『抱擁家族』、後藤明生『書かれぬ報告』など、新興住宅街を舞台に人間のかたを問う問題作が書かれた。特に『燃えつきた地図』は、行方不明の男をさがす興信所調査員（探偵）が、整然と区画整理された集合住宅と縦横に走る広い街路の中（多摩ニュータウンと特定しているわけではない）で、自身の存在を見失い、行方不明者となる物語。「東京」が、それまでにない「空間」となったことを問題視する作品である。

いづれにしても、東京にかかわる作家・作品論は、「東京」に関心を持つ方々にとって興味ある問題にちがいない。本書がそうした関心にお応えできることを望んでやまない。